【研究ノート】

「南北問題」教育方法序説

――校外実習（1991－2007）を振り返って――

勝　俣　　誠

はじめに

国際学部のカリキュラムの一環として，最初の校外実習を沖縄で実施してから 18 年が経った。私の校外実習の実施地域は，**表 1** に示すごとく，今日まで「南」ないし一般に発展途上国と呼ばれる国が中心となっている。1991 年東京港からの海路による沖縄訪問で開始され，その後は，タイ，キューバ・メキシコ，韓国・中国が一回ずつで，残りはすべてアフリカである。

これらの実習の目的は，広い意味では，国際学に位置づけられる南北問題の学びであることには変わりないが，学びの重点の置き方，手法・内容は，実施を繰り返すたびに変化ないし進化してきたと言える。

本稿の目的は，この 20 年近い校外実習の企画・実施を振り返って，どのような狙いで，どのような学習効果をあげることができたのかを整理して，国際学における校外実習とは何なのかという議論の考察軸（reference points）を提供してみようとすることである。

表 1　校外実習実施年度と訪問地

実施年度	訪問地	特別移動手段
1991 年	沖縄本島，八重山諸島	東京―那覇間は海路
1992 年	沖縄本島　八重山諸島	東京―西鹿児島間は寝台特急「桜島」，西鹿児島―那覇間は各港便，大島汽船
1993 年　11.12－11.25	タンザニア　山間地と平野部	病人は一部自転車荷台移動
1996 年　11.12－11.27	キューバ，メキシコ・ユカタン半島，中部山間部	
1997 年　10.31－11.8	韓国，中国	下関―プサン間フェリー「セマール日韓青春きっぷ」，上海―神戸間海路「鑑真号」
1998 年　10.29－11.7	ガーナ，オランダ	
1999 年　10.30－11.15	ガーナ，オランダ	
2000 年　10.19－11.5	フランス，セネガル	
2001 年　2002.2.15－3.1	ガーナ	
2003 年　10.29－11.9	タイ　山間部と海岸部	村落間は小舟
2004 年　12.15－12.27	セネガル	
2005 年　12.12－12.27	セネガル	
2006 年　10.25－11.7	セネガル　内陸，海岸部	マンブローブ地域は小舟
2007 年　10.29－11.7	セネガル	マンブローブ地域は小舟，村落では一頭馬車

この問いに答える前に，国際学および私がやはり 20 年近く学部教育に携わってきた南北問題の定義について簡単に言及しておきたい。

まず，国際学とは，一般に西洋史の文脈で言うところのリベラルアーツの「よりよく生きるために自由に学ぶ」という伝統を引き継ぐもので，世界と時代を広く解読する力を身につける営みと，筆者は位置づけている。したがって，国際学をグローバル・リテラシー（global literacy）と換言することもできる。

次に南北問題という学問領域も，広くこの国際学の中に位置づけられる。確かに，南北問題は第二次世界大戦後の植民地の独立と，冷戦期の東西対立という現代史の文脈から切り離すことのできない時代性を担っており，そこにおける経済学および政治学面での分析から問題群が抽出されている。しかし，「南」と「北」という地域性に着目する意味で，「南」の地域研究の蓄積にも，南北問題研究は多くを負っている。したがって，「南北問題」の地域研究的性格に着目すれば，地域で観察される多様な諸現象と各学問分野（discipline）を越えた領域の視点から説明する学際的アプローチも不可欠であり，国際学の区分に入れることは不当な位置づけでないであろう[(1)]。

こうした大区分を踏まえて，南北問題を定義しておくと，大方，次のように言える。「経済的に豊かでない『南』の地域と経済的に豊かな『北』の地域との間の格差，差別を分析し，より公正かつ持続可能な地球社会の展望を考察する学問領域」。

さて，本稿の中心課題は，これらの学問領域を学ぶにあたり，なぜ，キャンパスの外で，しかもあえて海外において実習プログラムを実施する必要があるのかという問いである。この問題設定から，校外実習の実施する中で一層明確になった狙いを，以下の 3 つの問いから整理してみたい。

1) 教室での講義と校外実習との教育上の違いはどこにあるのか
2) 校外実習は地域研究に対し，どう関連付けられるのか
3) 高校の修学旅行やスタディー・ツアーとの相違はどこにあるのか

なお，学生による校外実習報告書に筆者が毎年寄稿した感想文および学生の評価で，校外実習の性格を明らかにするうえで，特に参考になるものをいくつか選んで付属資料として 7 点のみ末尾に掲載した。

1. 実習と体験－教室での講義と校外実習との相違はどこにあるのだろうか

南北問題の授業は，格差，貧困，富の蓄積と偏在，低開発，住民参加，環境破壊など，主として社会科学の用語を中心に構成されている。しかし，講義において，世界の所得格差が「北」の富裕国と「南」の中の最貧国の間で，20 対 1 になっている統計資料が発表されても，その現実は必ずしもリアルなタッチで学生に伝わってこない。

これに対し，実習に参加する学生は，ビジネスクラスで移動し，高級ホテルにでも泊まらない限り否応なしに，南北間の移動過程も含めて（ANNEX 7 参照）「南」の最貧国の現実にたとえ断片的でも体験せざるを得ない。そのもっとも身近な体験は，生命の再生産を可能にする水，食，住といった基本的ニーズの原初的形態が実感できることである。

1-1 生命の再生産のプロトタイプの確認

人間の生命は他の動物と同様，一定の自然環境においてしか再生産されない。こうした事実を最も身近に実感するのが，私たちが最も利用する生活用水である。授業では，「南」の地域において，保健・医療や基礎教育といった住民が社会で生きていくうえでの公共基本サービスが極めて遅れているか，場合によっては皆無である現状を統計資料などで知ることができるが，そうした状況に近い体験をすることは，日本のような「北」ではまずない。

最貧国における私達の実習地では，総じて水道施設がなく，土地の水をそのまま飲料することはできない。そこで飲料水は学生が購入せざるを得ず，その他の洗うための水も地域の民家に行って井戸水などを利用するしかない。そこでは水汲み

は子供や女性の労働に頼り，湯水のように水を利用できないことを体験する。

食に関しても農村・漁村の宿泊施設に滞在することによって，早朝から地域の女性たちによる食事の準備と調理の全貌が観察できる。料理の水や薪はどこから調達するのか。薪用樹木の伐採は森林破壊や沙漠化を招かないだろうか。食材にはどのような地域の産物が使用され，それは市場で購入したものか，自家栽培されたものか。土壌はどう維持されているのか。料理に携わる女性たちは宿泊施設を運営する経営者の家族か，村民か出稼ぎか。食事は誰としているのか。包丁と火力で象徴される日本の台所機能を奪い，家族団欒の共有時間を解体した「北」のコンビニエンス・ストアー依存型文化生活とどう異なるのか。このライフスタイルで代表されるすでに調理された製品としての食が，「南」の宿泊地では，食の素材的，社会的準備プロセスが，リアルタイムで可視化されているがゆえに，モノやヒトやコトの地域内のつながりが実感できる[(2)]。（ANNEX 5 の「言葉との出会い」参照）

こうした生命の再生産にかかわる基本的側面は実習を通して可視化されるゆえに，参加者は「北」世界とのより明確な差異ないし格差を体感できる。

1-2　非市場原理による社会関係の発見と社会編成原理の複数性

第 2 の教室での講義との相違点は，前述の人間の基本的ニーズの確認作業を一歩踏み込んで，訪問先のニーズの充足形態を直接観察できることである。これは換言すれば，社会と市場という基本的タームの相違を実習中に発見ないし再発見することである。

ここでいう社会とは，人々が相互に関係性を持って生活していく集団で時代と地域によって様々な形態を取るとしておこう。市場とは，商品が価格メカニズムを通じて交換されるうえに成り立つ関係形態としておこう[(3)]。

南北問題の理解で特に重要なのは，この社会と市場をある程度明確に区別することである。前項で，人々は自然の中でしか生き続けられないことをみたが，ここでは，市場は社会の中でしか存在し得ないという点が確認されなければならない。逆に言えば，人類は市場なくしても世界各地で立派に社会を形成し，生きてきたことを例え部分的にせよ，「南」の地域での実例で実感することである。

今日，「北」の社会にいる私たちは，自分にとって必要と思われるモノやサービスのほとんどをお金で買うことができる。貨幣を媒介として，各人は収入の許す限り，世界中のモノを自由に選択し，購入できる。買うモノの選択の際，そのモノを売る人がどんな人物か，そのモノが，誰がどんなところでどのようにして作られたかは，問われない。買い物客がひたすら問うのは，安くていいモノを買うことだけである。売り手も，通常，できるだけ高く，多く売りたいと考える。この買い手と売り手の双方が唯一折合うのは，モノの価格である。相手の人格でもなければ，趣味でもなければ，生まれでもない。この意味で，市場というルールないし仕組みは，価格のみを通して，非人格化された，出自や地縁・血縁に関係なく，モノやサービスが移転する場であるということができる。

しかし，重要なのは，こうした市場行為が「北」の私たちの生活にとってごく当たり前のこととして受け入れるにしても，その原理が私たちの生活行為をすべて律しているわけではないということである。たとえば，「北」の富裕国社会においても，現代家族の間で，その一員が食事の準備や病気の時の世話をその都度お金を通じて取引し合うことはほとんどない。そこで作用する原理は，市場原理でなく，家族内の相互扶助原理や互酬性である。その他，社会にも市場原理に頼らないでモノやサービスが移動する例はいくつもある。例えば，私企業のように，利潤を最大目標とせず，協力原理のもとでメンバーシップを募り，モノやサービスを供給する連帯経済生活協同組合は，昨今経営改善が課題となっているが，日本に現在 165 あり，組合員数は 1547 万人にも上っている[(4)]。

ただ，「北」の私たちの社会は，市場原理がきわめて広く，隅々まで浸透しているので，「市場社会」などと，私たちの生活のすべてがその原理によっ

てのみ決められているという錯覚を持ってしまうのである。ましてや幼少年期において「夏休みの自由研究に『経済』を学ぼう」といった広告を通じて大々的に株式市場の「面白さ」ないし私利（interest）と有用性を刷り込まれる若年層にとって，経済とは市場ないし株価であると短絡的に決めつけてしまう。そこでは，購買力のある市場参加者と，購買力を前提とせず，人権を通して社会運営(政治)に参加する市民との違いが見えなくなってしまうのはある意味では当然かもしれない[5]。

もっとも市場原理は，「北」の地域だけでなく，「南」の地域にも見出されるが，社会の方向づける原理としては，総じて「北」の地域ほど支配的でないという点が 2 つの世界の基本的相違となる[6]。やや単純化すれば，「北」では市場原理は社会全体を完全ではないが，突き動かすことのできる強力な原理だが，「南」では市場原理以外の相互扶助や互酬性原理が根強く残り，これらが共存して社会が組織化されているのである[7]。「南」の地域の実習において，私たちが農村や漁村の協同組合や女性の扶助組織の訪問，村落の生業の組織形態の調査を実施する狙いはこうした社会編成原理の複数性を確認することである。

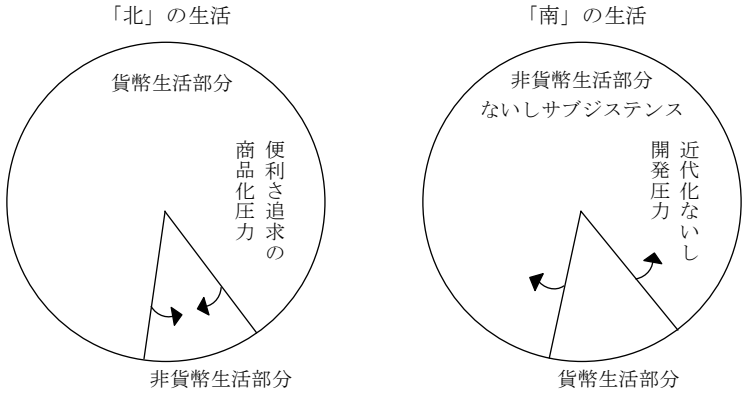
1-3　自給自足と「開発」

開発経済学，開発社会学，開発学などでは，相互扶助原理の通用する生活・生産部門が徐々に減っていき，市場で入手するモノやサービスの領域が広がることを総じて，「近代化」と言ったり，「開発」と呼んでいる。この意味で，これらの用語は，地域社会を支えてきた非市場原理に市場原理が取って代わることが社会にとって進歩の実現であるという前提に立っている。

図 1 は，「北」と「南」の人々の生活ニーズの全体を貨幣でやり取りする部分と相互扶助などの貨幣以外の手段でニーズを満たす部分（subsistence）に二分し，「南」と「北」の社会の相違を概念化したもので，「近代化」や「開発」とは「南」での貨幣部門のシェアを拡大することを指す。「北」でも，便利さや社会的認知を追求するためにますますお金が必要となり，商品化が生活・生命の細部まで浸透していく。この 2 つの世界の相違をまず現場で確認する時，しばしば相反する 2 つの基本的問いが生じる。1 つは「南」には「北」にあるものが不足しているから，不自由で貧しいという格差認識で，「なぜ貧しいのか」という問いである。もう 1 つは，「南」の一人当たり貨幣所得が低いから貧困であると考えてきたが，「南」社会の方が逆に生活のリアルなタッチがあり，人々はより生き生きとして見えるのはなぜか，「貧しさ」とは何かといった一連の問いである。

こうした自給自足に立った生業形態を広く現代文明において，どう評価していくかという課題は，「豊かさ」とは何かと問う中で，「近代化」や「開

図 1　貨幣経済から見た「南」「北」の相違の概念図



出所：筆者作成

発」のもつ時代の自明性を再検討するという切り口を提供してくれる。

2. 実習と地域研究－地域研究とどう関連付けられるのか

一言で，地域研究と言っても切り口は実に多様である。しかし単純化を覚悟でまとめれば，学部における地域研究の授業では，特定地域の言語をしっかりと身につけ，手抜きのないフィールドワークを息長く続けることを通じ，研究課題を追求するという地域研究者の養成そのものを狙いとしていない。むしろ，地域研究に学問的興味を持っていくような，研究への入り口を提示することが中心となっていると言えよう。

沖縄から始まり，東アジア，中米，アフリカへと実施してきた実習を準備して，現地での様々な出会い，コミュニケーションを通じて，特に重要だと思われた民族の多様性と植民地支配という 2 つの項目を地域研究との関連で解説しておきたい。

2-1 人々の生業形態の多様性の中で民族を学ぶ

メディアで報道される「南」の地域での出来事を通じて，その地域やそこに住む人々に対する特徴づけがなされ，しばしば，何々人はこうであるという固定観念をメディア情報の受け手に形成する。たとえば，パレスチナとイスラエルの紛争を異なる宗教や文化の相違による「宗教」対立としたり，ルワンダの 1994 年の大虐殺の原因をやはり単にツチ人とフツ人との間の「部族対立」として報道したりする現象である[8]。

しかし，一口に「民族紛争」と言っても，その紛争に至る背景は民族の相違によって説明することには無理がある。歴史的には複数の民族が共存・共生してきているのが大方の現実である。むしろ，共存から対立に至るプロセスを丹念に，様々な角度から検証することによって，対立の原因が明らかになる。

「南」の地域の訪問は，この多民族の生存形態が日常生活の体験を通じて発見ないし確認できる。総じて，実習時の宿泊，レストラン，バス輸送などに携わる地域の人々には，地方や近隣諸国出身者が少なくない。言語一つをとっても滞在地域の民族集団の言語以外が仲間内で飛び交ったり，私たちが質問すると家族などで話している言語を教えてくれる。

私たちが行ってきた実習は，安全上の理由から，武力紛争下の地域を避けてきたが，その地域から逃れて生活せざるを得ない人々にも出会う機会があった。民族は対立し得ることもあるが，共存する時もある。たとえば，風土からそこで生活する民族の特質を説明しようとした和辻哲郎の「風土論」は，高校の「倫理」の教科書にしばしば出てくるとのことだが，西アジア地域研究を地理学から接近している内藤正典は，「民族をどう教えるか」という高校教諭との対談で，以下のように安易な民族の特性化を戒めている。少々長いが，ニュアンスを伝えるために，引用しておこう[9]。

> 「・・・和辻は『砂漠の風土は荒々しい』と言いました。船で行ってイエメンあたりでみたのでしょうけど，『だからここに住む人間は荒々しいだろう』と結論づけているのです。何も知らないのによく書いたものです。彼は滞在したわけでもなく，ただ船に乗ってヨーロッパに行く途中で見ただけでしょう。おそらくヨーロッパの書物から学んだことを自分がみた情景にだぶらせて書いたのでしょう。だから，石灰岩の山を見て日本との比較でなんだか荒々しく思え，『砂漠の水をめぐって争う』人間が住んでいるに違いないということになったのでしょう。…確かに『乾いているから，一滴の水が大事だ』そこまでは正しい。でもそこから先は，論理的に考えれば『だから争う』という方向と『分けあう』という方向があるはずです。あまり気づかれていないけれど，そこで作意的に『争う』の方向に，私たちはもっていかれているのです。のどが乾いた旅人が砂漠で遊牧民のテントを訪れたとしましょう。実際にはズドンと射たれることは決してなくて，『よく来た』と歓迎されます。砂漠のなかを移動しているときにはお互いに困るから，基本的に，相手の財産を侵さないかぎり，客としてもてなしてくれます。だから逆に，ホスピタリティが発達しているんです。・・・」

このように，ある観察事象ないし視角に入った風景をただちに原初的に解釈するのでなく，その背後にある政治，経済，社会，文化的要因を丹念に探ろうとする姿勢が大切で，他民族が多くの場合，対立よりも共存や相互依存関係を形成していることを地域社会の接触体験から見出していく作業は，文献資料による分析・考察を一層豊かにすると言えよう。

2-2　実習と植民地問題

「南北問題」研究の一環としての実習の参加者は，単に南北間の格差実態に留まらず，格差の背後に底流する歴史の文脈に否応なしに向き合うことになる。

日本国内，とりわけ沖縄や北海道を除く日本において，世界各地の近代現代史に見出される侵略や植民地支配について，「よくないこと」や「犠牲者が多く出た」，「二度と繰り返してはならない」といった理解にとどまり，その歴史を生きた，ないし語り続けられてきた「南」の地域の当事者と直接接し，対峙することはあまりない。

これに対して，沖縄を含めて「南」の地域に足を踏み入れれば，さまざまな接触を含めて参加者は「北」ないしかつての支配した側の歴史を引きずっていることに気づかされる。

第1回目と第2回目の沖縄での実習は，日本語ですべてコミュニケーションが可能だったがゆえに，この近代史のいわば支配・被支配の関係に一歩立ち入った交流や気づきが実現できた。さらに，韓国，中国及びタイでの実施も，私たち日本からの参加者が歴史的に何らしがらみのない単なる外部者ないし透明人間としてこれらの地域を訪問したのではないことを実感した。そこでは，私たちが，アジア地域の中での関係性を背負って向き合うことが避けられなかった。

この意味から，日本人にとって「南」とは何かを自問しながらアジアを旅するたびに持った「日本人はアジアに行って，初めて日本人になる」という実感をアジア地域での実習で参加者と共有することが可能になる（ANNEX 2および3 参照）。しかし，このことは，アジア以外，すなわち日本の近現代史の直接ないし密接に関係を有さなかった南米やアフリカ地域では，植民地問題を実習と結び付けることの学習効果はあまりないということを意味しない。実習では事前学習として，訪問地域の歴史を勉強することはもとより，訪問地の公用言語がなぜスペイン語やフランス語や英語であるのか，独立とは何からの自由であったのかなどを問う中で，東アジアの近代史の文脈のなかを中心に語られ，論じられる日本社会での植民地問題をより世界史の次元まで広げて考察する機会が得られる。

これがまた，帰国後，日本での植民地問題のさらなる気づき作業へとつながることもある。そして「南」の人々と直接交流することによって，見る者は見られる者との歴史的関係性を逃れては対象とかかわり合えないことを学ぶことになる。

3.　実習と講義－高校の修学旅行および市民向けスタディー・ツアーとどこが違うのか

「南」地域を学習目的で訪問する活動は高校生を対象とした修学旅行や，一般市民向け開発教育現場ツアーの形態で近年活発化している。名所巡りの観光ではなく，南北問題の関心から「南」地域に行くという意味では校外実習と共通点がある[10]。

しかし実習の場合，参加者が見て，考えたことを再び大学での講義・演習での考察（それに啓発される実習報告書や卒業論文の作成）（ANNEX 1，4および5 参照）に明確に結び付けることを前提としている意味で高校や市民社会で実施される旅行とは異なるであろう。

確かに，この学内カリキュラムとの関連づけは国際学部の場合，参加者の関心や気づきが実に多岐にわたるため，企画・引率者である教員があまり強引に参加者の着地点を誘導ないし先導してはならないと考えられる。むしろ参加者の現場での発見の新鮮さを思考の面白さへと既存の学問体系の中でどう発展させていくかが教育者としての課題となる。しかしこうした点を留意しつつも，南北問題の視点からの実習体験から，「考えて，歩い

て，見て，また考える」というキャンパスの外との知的往復活動において切り口となる基本的問いを 3 つほど挙げてみたい。

3-1　格差認識の事後的考察

「南」地域における「北」との格差を単なる貧困格差として見ないことがいかに重要かはすでに指摘したが，教育と医療という「北」の富裕国では国家が提供するその基本的公共サービスに関しては,「南」と「北」の間には歴然とした不平等が存在する。

参加者が「南」地域で病気やけがをすると，直ちに都会の近代的病院で手当てを受け，その費用はほぼ全額保険によって戻ってくる。これに対して例えば校外実習に同行する「南」側のスタッフのほとんどには同じ条件が確保されていない。参加者が高級クリニックに収容されると，彼ら，彼女たちは同じ市内に住みながら，まず足を踏み入れたことのない所を発見することになる。「南」の圧倒的人口はこうしたセーフティネットの外で自らの健康を維持していかなければならない。生命の南北格差は実習中の健康問題で歴然とする。

こうした体験はまずは「南」の地で自分は体を壊したが無事帰国したという個人的困難の克服感ないし安堵感として把握される。しかし重要な問いは，なぜ「北」の私にこのサービスが直ちにしかも極めて恵まれた条件で確保され，あとに残してきた「南」の彼女たち，彼らにいまだほとんど確保されていないのか？ここから一連の社会科学からのたとえば以下のような問いが，想定される学問分野とともに設定できる。

－政府の役割とは何か？（政治学，経済学，国際政治学，国際経済学...）
－公共サービスとは何か？（上記に加えて，公共政策論，福祉学...）
－公共サービスが万人にアクセスできない政治経済的内外要因とは何か？（上記に加えて，社会開発論，ジェンダー論，国際協力論，南北問題研究...）
－訪問国以外の「南」の国々ではどのような対策をとっているのか？（各地域研究，社会開発論，国際協力論，南北問題...）

などなど。

3-2　持続可能な社会の事後的考察

持続可能性の概念を，1987 年発表された国連ブルトラント報告で登場する持続可能な開発の定義に依拠するとすると,「北」の過剰消費と「南」の過少消費こそが問われるなかで，地球環境という人類公共財を同世代を越えてどのように悪化させないで維持していくかという二重の課題が提起される。直ちに「過剰」とは何かという難題が待ち受けるが,「北」の社会においてはどこまで環境に負担を与えつつ便利さを求めることができるかという問いに還元することができる。

この“too much to us, too little for them”という 2 つの世界を体験する校外実習は帰国後に，自己の満足感ないし充実感の追及と物質的消費との関係を問うことが可能になる。たとえば以下のような問いが可能である。

－地球環境は全地球人口が等しく現在の「北」並みの生活水準を支える，生産，消費，廃棄を模倣したらどうなるかという仮説に耐えることはできないとしたら,「北」の譲歩（たとえば国連気候変動枠組み条約における「共通だが差異ある責任」）はどこまで可能か？（環境生態学，環境経済学，南北問題，国際機構論...）
－既存の国内及び国際的の仕組みがもし十分に機能しないとしたらどのような他の取り組みと仕組みが必要か？それらの実現を遅れさせたり，妨げる要因は何か？（政治学，経済学，国際政治学，国際経済学，国際機構論...）
－物的生産と経済成長を中心としてきた開発（より多く，より速く）概念を定常系社会（より少なく，よりゆっくりと）の実現へと時代の価値観ないし思想をパラダイムシフトすることは可能か？（文化人類学，現代文明論，比較文化論...）－

3-3　共生・共存の事後的考察

校外実習参加者は事前学習ないしリサーチで訪

問地域の生活や歴史に関する知識をある程度身につけて行くが，現地では様々な文化的差異に出会う。これらの体験を自分の価値観でのみ判断したり，評価するのではなく，まずは自分が依拠してきた，また信じて疑わなかった考えや価値観を相対化し，つぎに相互理解の可能性を探る知的作業へと結びつけて行く。この相対化作業には少なくとも2つの側面が重要であると思われる。価値の複数性（plurality）と事象の分類識別（taxonomy）能力である。まずは相対化作業は複数の分析手法や論理構成を得て始めて作業が可能になることである。換言すれば，実習中に出会う様々な社会文化現象を対象地域の文脈でも考えてみることができる思考ツールを持っていないと，参加者は目前の理解しがたい現象を安易に「野蛮」,「遅れ」,「異質」な出来事で片づけて，さらなる思考を停止してしまうような状況を避けることである。

もう一つ大切な点は出会った事象をすべて自分対他者，自国対外国といった単純な二分法による思考を避ける訓練をすることである。事象をまさに複数の分析道具で分類，識別し，その複雑性を謙虚にまずは耐える知的作業である。たとえばアフリカ地域と言っても，地理的，歴史的，文化的に多様性であり，アフリカ地域内の相違と共通点を識別する知識ないし識別基準を身につけていくことが肝心である。

また「南」地域，とりわけ都市部において，参加者は年々世界中の商品が溢れる訪問地域の市場や林立するインターネットカフェなど,「南」でも進行するグローバル化の影響を目の当たりに観察することになる。こうした現象の背後には，とりわけアフリカ地域の場合，膨大な石油や農産物の資源需要が存在している。実際，南北格差の分析を一歩踏み込み，前述の持続可能性とも関連するが，この経済のグローバル化により「北」の消費水準だけでなく，従来「南」に分類されてきた中国，インド，ブラジルなどの人口大国が中進国として世界経済に登場する中で，石油や農産物などの資源需要が急激な膨張を遂げている現実を直視する必要がある。

こうした中で生じる資源獲得競争を軍事化を伴う国際紛争に発展させないために，資源の共同管理，最貧国に開かれたアクセス，節約などを討議・交渉し，妥協する新たな国際的枠組みがいつの時代にも増して，問われていると考えられる。社会に紛争はつきものであるが，ある対立をいかに暴力的，ないし武力の行使を伴なわない手段で，避けて，かつ和解していくかという問いこそ共生・共存を考える上で重要であり，グローバル化の中で急速に変貌する「南」を訪問し「北」に戻る参加者は，国際資源紛争をどう避けるかという問いも持って帰ることになる。

この観点から以下のさらなる問いが提起可能となる。

－「南」地域の経済のグローバル化を強力に推進しようとしてきた国際通貨基金（IMF），世界銀行，世界貿易機関（WTO）の国際経済体制と南北対話を国際的に促進してきた国連の枠組みとを比較すると，どのような相違と共通点が見出されるか？（国際機構論，国際金融論，国際法，国際関係論，国際政治経済学，世界経済論...）

－経済のグローバル化を担う私企業やグローバル化の生む地域や社会の格差・貧困，国際移動労働者の人権などその負の影響に注目し，是正しようとする非営利市民団体などの非国家的主体はどのような活動をして，どのような展望を有しているのか？（南北問題，国際金融論，企業経営論...）

－そもそもグローバル化が不可避に生む万物の商品化ないし資源化による希少性の創出を満足一定の原理など複数の価値観と分析手法でどのように相対化できるか？（現代文明論，平和学，文化人類学，生物学，文化交渉史，社会科学概論，宗教学など...）

結びにかえて－地球市民に向けて

以上，校外実習の体験を振り返り，国際学部のカリキュラム，とりわけ筆者が担当してきた南北問題講義と演習という学びの過程に，実習の方法論的位置づけを試みた。とにかく学生と旅に出て

みることが肝心で，過剰な学問的，教育的意味づけは必要ないという意見もあるかも知れない。しかし，筆者の研究・教育領域からすると，校外実習はある時代性（hic et nunc ラテン語で「今そしてここで」）を担っている。なぜ「北」でなく，「南」なのか。なぜ将来でなく今実施するのか？

実際，「北」の人間が「南」に行く時，「北」の私たちはなぜ行くのかを問い，「南」の彼ら，彼女たちはなぜ来るのかを私たちに問う。「北」の人々が同じ「北」を訪ねるのとは必ずしも同じでない近現代史の重力がそこに作用する。「北」のわたしたちは「南」に比較的容易に行けるが，「南」の人々は望んでも簡単には「北」に来れない（ANNEX 6 および 7 参照）。この機会の非対称性をどう読み取るのか。実習では単に途上国援助の手法を学ぶために行くわけではないが，国際協力は南北の間で避けられない学習対象の一つだ。地域研究を深めるために行くにはあまりに短く，あまりに準備が足りないが，そのアプローチは大いに学ばなければならない。そこには異文化理解ないし体験以上の意味の付与がある。

校外実習を今後，事後評価してフォローアップしていく際，何らかの判断基準が必要であろう。「南」地域で校外実習を企画・実施面で協力してきた「南」の友人たちはよく「あの学生たちは卒業して，今どうしている」と筆者に問う。筆者は全て把握しているわけではないが，「南」地域と何らかの積極的関係をもつ仕事（国際援助，流通，メディアなど）に携わっている卒業生は少なくない。これらの卒業生の職業選択で実習参加体験がすべて決定的要因になったか分からないが，当面そうした展望を意識して，演習を選択する学生は多い。

筆者としてはつき詰めるところ，校外実習は他の学部カリキュラムとあわせて地球市民となるために，その形成に不可欠な世界を解読する力（グローバル・リテラシー）を身につける学習活動の一つに他ならないと考える。

注

(1) 国際学とは何かについては勝俣誠，「国際学としての『南北問題』研究－3 つの新たな関係性を求めて－」，学部 10 周年特集，国際学研究　第 16 号，1997 年 pp.73-83，参照。

(2) 可視表現をアナログとデジタルをキーワードとして論評したものとして，写真家・作家の藤原新也の記事を参照。「デジタル化する人間の眼」，朝日新聞，2006 年 4 月 3 日および「これからのカメラと写真表現」，朝日カメラ，2006 年 4 月号 pp.152-153。

(3) 本稿では市場の定義を「いちば」と読むか「しじょう」と読むかによる違いや土地，労働，貨幣（資本）の生産要素としての商品化を容認するか否かという経済の認識論的考察には立ち入らないが，南北問題の分析において極めて重要なので，改めて別稿で論じたい。

(4) 日本経済新聞，2005 年 1 月 7 日

(5) 例えば最近では「親子で学ぶ夏休み　株式市場の観察－いよいようれしい夏休み，今年の自由研究は「経済」が人気の的」，広告特集，日本経済新聞　2007 年 7 月 18 日夕刊　を参照。

(6) もっとも「南」と言っても限りなく「北」に近い中進国もあり，ここでは区分概念を明確にするため単純化している。

(7) 社会をまとめる統合ないし結合の原理を明解に整理しようとした文献としては，カール・ポランニーの著作「大転換」，東洋経済新報社，1975 年がある。またマルセル・モースの著作「贈与論」『社会学と人類学』，弘文堂，1978 年も参照。

(8) 「部族対立」による紛争要因を説明しようとする不適切さを指摘したものとして，英語による拙稿を参考されたい。Makoto Katsumata, From Zaïre to Congo: An End of Westerner Supported Dictatorship, *Connect*, Vol.1, No.8, June/July 1997, International Movement Against All Forms of Discrimination and Racism, IMADR, Tokyo and Geneva.

(9) 月刊「地理」，44-3 号，1999 年 3 月号，p.46

(10) 観光でないという点に関し，私たちのゼミでは以下の文献を教材の一つとして全員が読んだ。確かに，校外実習の内容とそぐわない課題が若干見い出されるが，人々との接し方の基本が含まれているのであえて使用してきた。

三大規律はつぎのとおりである。

（一）いっさいの行動は指揮にしたがう。（二）大衆のものは針一本，糸一すじも取らない。（三）いっさいのろ鹵獲品は公のものとする。

八項注意はつぎのとおりである。

（一）言葉づかいはおだやかに。（二）買物は公正に。（三）借りたものは返す。（四）こわしたものは弁償する。（五）人をなぐったり，ののしったりしない。（六）農作物をあらさない。（七）婦人をからかわない。（八）捕虜をいじめない。

出所：「三大規律・八項注意をあらためて公布する

ことについての中国人民解放軍総司令部の訓令」（一九四七年十月十日），『毛沢東選集』第四巻

付属資料

Annex 1.　1993 年度　タンザニア報告書

「まえがき」: 学生編集　S.T.

ちょ，ちょ，ちょっと，待ってぇ〜!!　表紙を開いたそこのあなた,「前書きなんて読まなくてもいいや」なんて思って読み飛ばさないでください。この文集を読む前に，一つだけ念頭に置いてほしいことがあるんです。それは，私たちが体験してきた“ポレ・ポレ（Pore Pore）”の精神について。訳せば“ゆっくり，ゆっくり”と言う意味ですが，それ自身の捉え方はさまざまあって，よく言うと“のんびり”とか“take it easy”ぐらいの感じなのですが，悪く言ってしまえば，“いい加減”なんてことになってしまう。非常に曖昧で，かつデリケートな精神なのです。

私たちのゼミでも，この精神については実習前に頭の中にあったのですが，タンザニアに入ってから，なるほど，いろいろな場面で，いろいろな形で，この精神を感じてくることができました。この文集のなかには，そんな私たちの体験が言葉を尽くして書かれてあるし，そしてまた，文集を作り上げてきて実感したのですが，この文集それ自体に何となく“ポレ・ポレ”が染みついているように思われるのです。この文集が出来上がるまでに，かなりの時間がかかってしまったのは，別に力を入れたとか，構想を練り込んだとかそういうことではなく，これは単に私たちのいいかげんさなのではないか（笑）と思いますが，私個人としては出来上がったこの文集を見て，いろいろと不完全な部分も多いけれど，これが“ポレ・ポレ”なのかなあ，と思っています。そんな“ポレ・ポレ”の雰囲気が，読むあなたにも感じていただけたら，うれしいです。それでは，どうぞごゆっくりお読みください。

Annex 2.　1996 年度　キューバ・メキシコ地域報告書

「校外実習へのコメントないしおはなし」: 筆者

「『他人の声は耳で聞き，自分の声はのどで聞く』と父が言った。そうだ，自分の命ものどで聞くのだ。しかし，他人の命は？・・・（中略）だが，このおれというものは，おれ自身にとって，のどにとって，いったい何なんだろう？　それは一種の絶対的な肯定だ。狂人の肯定だ。ずっと強い強靭な力。ところで，他人にとって，おれというものは，おれがしたことだけが全部なんだ。」

これは私が大学生の時読んだアンドレ・マルローの「人間の条件」の一節である。孤独にさいなまれた各人が「革命」という名の下で，人々とのつながりと行動をめざして租界地区上海に集まる 1927 年のある日が舞台となっている。何としても他者をつかみ，分かち合いたい，その仕掛けないし舞台装置が，アジアの貧困・不正・不平等を一挙になくすはずの「革命」に託されていた時代の話である。

しかし今日こそ，この仕掛けが何か遠い昔のように思える時代はないように見える。大きなおはなしに対する不信や無関心があるからだろう。

だからといって,「革命」という仕掛けによって気づかされる人々の間に生んだ貧困，社会不正，人間の尊厳の蹂躙といった現象がなくなったわけではない。今いるところから見えないだけだ。見えないなら，見ようとし，こちらから見に行かなければならない。

そこで選んでみたのが，キューバとメキシコだった。本当にあっという間の短い期間だった。しかし，卒業を控えた君たちに，この旅が 3 つのことにこだわるきっかけになればと思う。

1 つは，今日本の社会は限りなく細分化されていることに気づくことだ。寝る場所とコンビニの往復だけですべてを選んだ気になれる自己完結した世界が実現可能な社会だ。その反復の間に，南北問題などといっても，ヒトとは一義的に自分の生きる場で規定されてしまうことがある以上，実感がわかない。メキシコやキューバといった私た

ちにあまり身近なものに感じられない「南」の場所を選んだのは，何よりも「北」のこの細分化された社会から共に少しでも脱出してみる必要があると思ったからだ。

2 つ目は，今の時代，いやこの半世紀，日本には天地がひっくりかえるような大きな出来事が起きていない。戦争がなかったり，膨大な失業がないことはいいことだ。しかし，他方では，こののっぺりとした日本のこの状況は，ともすると，実は世界とは傷だらけの出来事の上に作られてきたことが忘れられてしまう。

映像から実像の世界に踏み込み，たとえ断片的でもそれを生きた世界に接してみよう。メキシコとキューバ，この 2 つの国は，「革命」という大きな出来事なくしては考えられない。傷だらけの歴史を生きてきたし，今も生きている。まぎれもない「南」の地なのだ。しかも，この地の人々は，たとえ今や神話の世界に近づきつつあろうと，この過去を誇りをもって語ることが多い。困難な時代にはそれに立ち向かう勇気ある人々を生む。冒頭の「人間の条件」の登場人物もこの区分に入る。

しかし，今この時代の日本には，大きな歴史とは出会いがない。少なくとも今のところは便利と選択肢にあふれた「ニッポン」に生まれてよかったのかもしれないけれど，他方，歴史には出会えない不幸な時代かもしれない。南北問題を上倉田町の白っぽい建物の中で，こののっぺりとした現代史を生きてきた君たちと自分がどう考えていくか，いかに面倒かが分かる。せめてものきっかけは，どんなに欺瞞に思えようが，心の底でやっぱりおかしいとか，何か喉につかえるものがあったら，それを大切にすることだ。そこからしか，自分たちの作りたい世界は見えてこない。

最後の 3 つめは，予言めいているが，校外実習のみならず，ゼミ全体に関わることだ。私は日本，そして世界で，今の時代がいつまでも続くとは思っていない。こんなことはいつまでも続くはずがないというのが自分の実感だ。ではどんな危機が自分たちを待ち受けているのか。私にはこの危機の性格を今確定できない。しかし，キューバ島の若い人々に会って，サボテン畑で働くメキシコの女の人々に会って，彼女らは確実に危機を生きている。しかしまた，生き生きとしている。それが私にはすごく大切な再発見に見えた。たとえ，危機が来ても，困難な時期が訪れても，それに誇りをもって共に立ち向かえる自分を今から備えること。

この意味で，太平洋を渡り，メキシコ湾を経てカリブ海にまで行って，戻ってきたこの旅は決して終わってはいないだろう。

Annex 3.　1997 年度　日本，韓国，中国報告書「生きることに遠慮はいらない－人々の東アジア」：筆者

私はある時から，おそらく様々な地域と雑多なやり方で旅行できたせいかもしれませんが，世の中を治める側と治められる側の二分法で見ることに抵抗を感じるようになりました。世界中のさまざまな地域のさまざまな人々の生きる風景をただ眺めてみたい。

身近な例を引いておきます。私はしばしば都内の自宅から大手町方面行の地下鉄丸ノ内線に乗りますが，時間帯によって様々な人々が乗り合わせています。朝のラッシュアワーだと通勤する人々が中心で日経新聞やパソコンのマニュアルなどを呼んでいる人が結構います。しかし昼ごろのがらんとした車内だと子連れの主婦や年長者などが目立ちます。

また，スポーツ新聞やコミックを呼んでいる若者や中年の人々も目につきます。明らかにこの 2 つの時間帯に乗っている人々は異なっています。「くに」の今の経済や政治を動かす人々が多く乗るのが朝の電車とするならば，昼下がりの電車は多くの場合そういう人々の決定によって動かされる人々が多く乗っている電車ということになります。そこで，どっちの電車により多くの人々を動かす人々が乗っているかと考えるのが権力関係で物事や人々を判断する見方に対して，どっちも要するに今を生きる人々だと自分に言い聞かせるのが今の私の立場です。

東アジアへの旅でも，この人々のあるようにある風景を学生と見てみたい。それが私の旅へのア

プローチの大切な側面の一つでした。下関の港ターミナルの待ち合わせ室で一緒に行列を作った担ぎ屋のおばさんたち，釜山の港市場で今川焼のようなものを売っていたお兄さん，自分の身の丈の倍の大きさの荷物を自転車の荷台に乗せ人ごみのなかをすり抜けていったおじさん，上海行きの列車の中で外国に行きたいと言っていた中国の若者たち，上海からの神戸行きの食堂で会った日本人の青年，皆それぞれ生きています。誰でも生きることに遠慮はいらないのです。

東アジアの人々と「くに」を，永田町とホワイトハウスと中南海の立場から見るのではありません。とにかくあるがままに見たい。それが今回の私の実習のコンセプトの一つでした。東京駅から東京駅まで 4 つの港を使ってあえて旅をしてみたのはそのためでした。

だからといってこれらの地域の歴史を考えなかった旅ではありません。人々は時々の権力によって，ある時は酷使され，ある時は主人公としてもてあそばれてきました。彼らにはどんな過去の記憶があるのだろうか。権力の教える過去，家族や地域の人々が生きた過去，外部の私たちはそれらをどう知って，どう考えたらいいのだろうか。

そこでも私はとにかくは人々の生きざまから考えてみたいと思っています。人々を文明というとてつもなく大きな概念でくくってしまうのではなく，日々人々が生きる，限りなく多様な文化の眼からみてみたい。毎日，何を食べているのだろうか，何が日常生活の中で一番心配なのだろうか。

Annex 4.　1997 年度　日本，韓国，中国報告書「序章」：学生編集 A.M

韓国・中国を訪れてから一年以上が過ぎた。私たちは，海を渡り，陸を越えて 2 つの国を歩いた。遠い昔から多くの人たちが行き来した道を辿った。

歴史はすべてつながっている。過去と現在の間が途切れることはない。韓国も中国も，日本とは戦争という過去でつながっている。私たちは，その過去を自分たちの足で歩いて受けとめた。そして，現在から未来へとつなげる道を見つけようとした。

この文集を作るにあたって，皆で話し合い，実習の報告だけで終わるのではなく，実習での発見を材料に，そこから私たちのゼミのテーマである生命･生活･生産を考えようということになった。それが市場・政府・市民のページである。

文集に取り組む時期が遅くなってしまい，卒論の完成の方が先になってしまったが，それによって，卒論のまとめをここに載せることが出来た。それぞれの問題意識は，様々な切り口から論じられており，これを読むことで，また新たな考えるきっかけを得ることができるのではないかと思う。

Annex 5.　1998 年度　ガーナ・オランダ報告書 “Prologue”：学生編集 K.K

「形を作ってしまうと楽になることもある」。これは知人に言われた言葉です。ゼミにおいての私は，ある意味この言葉に沿った行動を重ねていたと言えるかもしれません。ゼミの仲間たちは，あえて言葉にしてわたくしに言うことはありませんでしたが，「楽」を創り出した私とは反対に，「難」を強いられていたのではないかと反省しています。

前述の知人の言葉には続きがあります。「でも，それは本当の自分ではない。一度形を作るということはそれを続けていかなければならないということでもある」と。

なにかに捕らわれたくないあまりに自身を縛りつけていた。それが私でした。そんな頑なな私に見かねたのでしょうか，ガーナでの生活は私にある言葉との出会いを用意してくれたのでした。「自分をさらけだしていい，戻ってもいい。自分の手でつかむこと。」上手に日本語で表現できないのですが，こんな内容の言葉でした。

電話や E-mail，その他もろもろの通信道具に囲まれて，たくさんの情報を取捨選択できない状態のなかでの生活。日本でしたら，きっと出会ったとしてもすぐどこかに流れてしまっていたでしょう。言葉が私の中で留まることなく，それについて十分に考えることができないままに終わったかもしれません。ガーナだったからこそ，日常から離れた日常にいたから，受け止めることができた言葉なのだと思うのです。

校外実習の期間につけていた私の日記は，この言葉との出会いを記したところで止まっています。細かいことを書きなぐっていたそれまでの日々とは違った形で，その後の日々を過ごすことができたのかもしれません。あるいは，単なる三日坊主の見本なのかもしれませんが・・・

ゼミ活動を通して，「南北格差を考える」ことを掲げてきた勝俣ゼミですが，12 人のゼミ生がそれぞれの視点からこのテーマに取り組んできました。「南」と「北」という 2 つのグループが何故生じるのか。このテーマのもとで，実際にアフリカ大陸にあるガーナという地に降り立ち，自分の目で，耳で，肌で，見てきて感じてきたことは，これからのそれぞれの人生できっと何らかの形で残っていくだろうと思います。

校外実習の記録を一冊の形にまとめる作業が，96K 勝俣ゼミの最後の活動となりました。でも，きっと校外実習はこれからも続いていくのだと考えています。今までに蓄えてきたことをどのように活かしながらこれからを歩んでいくのか。幾年か経った日に，振り返ることによってわかることなのかもしれません。

それぞれのゼミ生が各々のゼミに対するスタンスを貫きとおしてきた集団です。あえてここではいわゆるゼミ紹介となるものを書くことは避けました。それは，私には私なりのゼミの捉え方があるように，ゼミのみなにもこれをお読みになる方々も，その人なりの 96K 勝俣ゼミの捉え方があると思ったからです。(きっときっとご理解いただけると信じて。)

追伸：勝俣ゼミではじゃんけんに強いことが望まれるかと思います。

Annex 6.　2004 年度　フランス・セネガル報告書「「北」から「南」へ－暴力空間の ANATOMY（解剖学）」：筆者

2004 年 12 月 15 日，私たちは冬の成田空港からまずパリに向かった。泊まった空港ホテルのスタッフはアフリカ系であった。次の日このパリ空港ホテルから市内への切符を買う時，2 度目のアフリカ系女性切符売りの彼女に出会った。団体なら安くなると割引往復切符の買い方を細かく教えてくれた。「南」との最初の本格的出会いだ。パリ市内は東京よりももっと寒々しかった。

そして，その日の午後戻ったパリ郊外の空港からダカール行きの便に乗った。機内に僕たちが入るやどこからか叫び声が聞こえた。注意して機内を見回すと機内の一番後ろの座席で二人の警官に抱えられ，叫ぶ背広姿のアフリカ人に気づいた。やがて，彼がフランス語で何やら叫び続けている。よく耳を傾けるとフランス語で，「私の弁護士を呼んでくれ。」と全身の力を込めて叫んでいるのが分かった。同じ機内で居合わせたクリスマス休暇をアフリカで過ごそうとする欧州の観光客の一人がこの叫びにたまりかねて，二人の警官に同伴する責任者らしき警察官に「こんな状況で飛行機は出せるのか」と詰め寄ったところ，その警官が興奮した目つきと口調で答えた。その内容は聞き取れなかったが，乗客は黙って席に戻っていった。

アフリカ青年の叫びは離陸するまで飛行機の轟音の中でもはっきりと聞き取れた。彼の叫びは，私には，「あの飢える国から，おれは抜け出したいのだ。またあの貧乏な国に今更戻るのは絶対イヤだ」という強烈なメッセージとして聞こえた。

私たちはこの機内で，すでに「北」から「南」への移動で学びの入り口を暴力的に体験したわけだ。

グローバル化とは，地球規模で，モノ，カネ，ヒト，情報などがものすごい規模と速度で動くことだとよく説明される。しかし，これらがひたすら真空状態で自由気ままに移動しているわけでない。豊かな地域，市場のあるところ，資源のあるところをめがけて移動することがほとんどで，決してその逆ではない。こんなことを考え出したのはこの校外実習のときが初めてではない。日本から欧州を経由して，西アフリカに行くたびに，アフリカから富裕国の集まる欧州めがけての，人々があらゆる手段を使っての入域圧力をひしひしと感じる。

たとえば，アフリカから欧州の空港に着いた時の緊張ムード。私たち「北」からの訪問者にはさほど厳しくないが，入国者が，アフリカのような

「南」の地域からの人々とわかると，入国は極めて厳重になる。数年前，アフリカからの便は，パリ空港に着陸した飛行機から到着ロビーに入る廊下で，まずは空港警察によるチェックがあり，そのあとが通常の入国審査と二重チェックが通例となっている。その機内から出た地点で疑わしいと判断された乗客は，そのまま列から別のところへ連行される。「北」の空港とは，何とその南北間の力関係ないし不平等がかくも可視的になる暴力的空間であることかと通る度にその引力差をひしひしと感じる。

もっとも，貧しい「南」から豊かな「北」へのこの脱出への試みは,空港だけでの出来事でない。つい最近，アフリカ大陸と欧州大陸の接点となるジブラルタル海峡に面する脱出ルートのいわば銀座通りとなっている都市で，サハラ沙漠越えに成功したアフリカの若者たちが，スペイン領の二重の網に上り，越えようとして，治安部隊と衝突し多くの死傷者を出した。なぜ，そこまでしていくのか。

この夏，私が出張したセネガルでは，大洪水があった。もともと下水道が未発達で，貧困地区でコレラが大量に発生した。規制緩和で，ケータイ電話は未曽有に普及し，送金も今や迅速，確実になっている中での，グローバル化の中での貧困である。いや貧困が近代化しただけの現象なのかもしれない。

そして「北」に戻る度に思う。同時代を生きる人間として，この暴力的格差を自分は心の中でどう消化できるのかと。

誰もが自分の安全と幸せを願う。ここまでは自分事で実行しやすい。しかし，そもそも南北問題とはそれに加えて，他の地域の人々も同じように生きれる権利があるという気づきの前提がないと成立できない。

自分で精いっぱいの思想を越えて，プラスアルファとして他者の尊厳の認知という想像力が少しでも君たちの心や頭の中で育てば，この校外実習という「北」と「南」の間のある意味で暴力的移動も希望の旅と位置づけることができると思う。

東京・横浜　2005 年秋

Annex 7.　2005 年度　フランス・セネガル報告書

「途中で通る場所からも学ぶ－2005 年 10 月 27 日」: 筆者

雨の成田空港を僕たちは慌ただしく出発した。その日の夕方，パリ郊外の空港に着いた。今回はセネガルに行く経由地のパリの市内で一泊しようと，中心部のホテルを予約した。市内への鉄道での移動は荷物があるので，ネットで見つけた格安ミニバスタクシー2 台を予約しておいた。

しかし待てども待てども，タクシーは迎えに来ない。何回も電話で催促する。渋滞で大変ですとの返事。渋滞を想定して迎えに来るべきではないのかと反論してみた。

しかしその日はまさに僕たちが通過するパリ郊外北西部で若者の大暴動が起きた日だったことを後で知った。アフリカからの移民の家族が多く住む地区で，この日の夜，二名のアフリカ系若者が警官に追われて，変電所に逃げ込んで感電死した事件をきっかけに，地区の若者たちが車に放火するなど騒乱状態が起きたのだった。迎えが遅れたのはそのせいだったかもしれない。タクシー会社に何度も強くせかしてしまった自分がやや恥ずかしく感じた。

・そして村で

数日後，僕たちはセネガルの農村部にいた。イスラーム人口が 9 割以上のこの国は折からの断食の最中で，イスラーム教の同僚は日中は食事をせず，木陰でラジオを聞きながら横になっていることが多かった。僕も横にいて，サハラ沙漠を越えて刻々と伝えられるフランスのパリ郊外で生じて，全土に広がった若者の暴動ないし反乱のニュースを毎日耳にする羽目になった。

こんな静かなアフリカの炎天下の農村では，恐らくこの辺の地域からの出身者やその子供も住人であるかもしれない「北」の大都市の郊外で，移民出身の若者が車に火をつけたり，警官隊とぶつかりあったりしている光景を頭に描こうとしても何か別世界の出来事のように感じられた。

しかし，都会に戻りパリ経由で日本への帰国に着く頃になると，この郊外暴動の情報が映像でも活字でも一挙に私の周辺に氾濫し始め，否応なし

に自分なりの見方を迫られる結果となった[1]。

・日本に無事戻り，考えたこと

郊外暴動は多くのメディアにおいて，先進国の移民政策，若者の失業，イスラームとの結びつきなど，様々な角度から説明がされようとしたが，私にはどれも一面的で，そう断定していいのかと疑問に思った記述や解説も少なくなかった。

まず郊外問題は外国人問題ではないということである。今回の暴動に参加した圧倒的な若者は，移民家族出身者だが，れっきとしたフランス国民・市民である。したがって，フランス当局が外国人移入問題して，入国を直ちに厳しくしたとして，「すべての社会問題は外国人のせい」としたがる世論の一部を喜ばせることになっても，問題の核心にはつながらない。不法入国したアフリカなどの「南」からの流入者は，いつ勾留されるかわからない不安のもとで大都会の貧民街に潜むように住んでいる別の集団である[2]。したがって，郊外問題の核心の一つは，これらの若者が暴動という政治的表現しかとらなかったという意味で，自由，平等，博愛を看板としてきたフランス「共和国」の国民・市民づくりの失敗を意味しているのだ。

また，郊外問題はイスラーム問題ではないということだ。暴動に参加した若者には多くのクリスチャン・ネームがある筈だ。また，イスラーム教の家族出身者でオマールとかモハメットという名をもっていても，どこまでイスラームの教義を行動の指針としてるか疑わしい。彼らは，ラップ・ミュージックの身体作法を身につけ，カリフォルニアに憧れているかもしれないシティボーイなのだ。

もっとも南からの移民の市民づくり問題は，フランスだけでなく，英国，米国でも生じている。ただ移民に極めて制限的な日本だけは，グローバル化時代の都市がつきつける市民性の問題とそれを乗り越えようとする民主主義のダイナミズムの経験を今だできないでいるのではないか。日本以外の「北」では，世界中から持ち込まれる文化の多様性と普遍な人権をどう両立させていくかと，社会的，政治的苦闘をしている。

・校外実習のもう一つの学び

僕たちのアフリカの校外実習にとって目的地へ直行する便はない。欧州経由が多い。いつも思うのは実習はアフリカの飛行場に着いたら始まるのではなく，その前の様々な準備はもちろん，成田を出て途中で通る空港や都市も学びの一環だということだ。「南」と「北」の問題はすでに僕たちの前に立ち現われているのだ。ただ気がつかないことが多いのだが。

注

(1)　僕たちがセネガルを立ち，パリに着いた 11 月 8 日には政府によって異例の非常事態宣言が出された。

(2)　11 月 1 日，僕たちが森林局のスタッフと訪ねた村では，日本とセネガルとの交流のために，この訪問をきっかけに村の若者十人を日本に受け入れるためのビザを贈り物としていただけないかという陳情が村人代表から突然出された。そうすれば，若者は日本で自ら稼いだお金で村の開発に貢献できるとのことだった。僕も意外な要請に戸惑ってしまった。僕たちのパートナーの ENDA スタッフは直ちにそのような目的で学生たちはここにいないと説明して事態は収まったのだった。